



社会科学研究部報

令和5年6月22日
浜松市教育研究会 社会科学研究部

令和5年度 第1回社会科学研究部 研修会

5月24日（水）に雄踏文化センターにて、今年度の研修テーマの趣旨や、2回目以降の研修会についての案内が伝えられました。

1 顧問校長あいさつ

初生小学校 校長 村松 健史

本日の研修会では、今年度の研修の方向性が示される。授業づくりの際、研修とどのように結びついているかを考え、「社会科の見方・考え方」を働かせた授業を実践して欲しい。

今年は大河ドラマ『どうする家康』が放送されており、浜松市は大いに盛り上がっている。初生小学校の近くにも「信玄道」という道があり、三方原合戦の名残が残っている。しかし、歴史上の人物を捉える際、当時の本当の姿を知ることはとても難しい。それについて磯田道史教授は、「歴史を知るうえで、尾ひれの付き方にこそ当時の人々の思いが残っている。」と述べている。社会科の授業では「人」に焦点を当てる場面が非常に多いと思うが、その際には「思い」や「心」に目を向けることで、その人物の真の姿に迫ることができると思う。今後の授業づくりに、ぜひ役立てて欲しい。

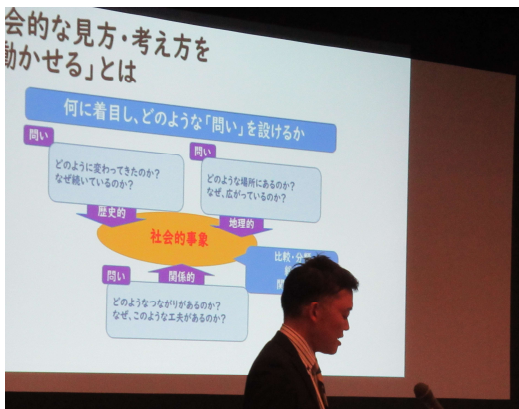


2 本年度の研修テーマの趣旨

可美小学校 教諭 古山 政一郎

社会科の「見方・考え方」を働かせて課題を設定する子供たちの姿を、3年「市の様子うつり変わり」を例に紹介する。子供たちは、教科書会社が社会的な見方・考え方を表したイラストを用いて、位置や空間的な広がりか、時期や時間の経過か、事象と人々の相互関係かなど、どの視点を基に問いを立てるべきか、全体交流をしながら、問いを見付けようとする姿が見られた。

併せて、「見方・考え方オリエンテーション」を実施して欲しい。単元の始まりや終わりで、この学習で



どんな見方・考え方を働かせて社会的な事象と向き合うべきなのか、どのように学びを進めてきたかを振り返ることで、社会科の学び方、見方・考え方の働かせ方を児童が自覚することができる。

様々な社会的な事象から「人のいる風景」を選び、そこにある「見えない」思いや願い、努力や工夫を考えさせて欲しい。「見えないもの」が見えるようになり、なんとなく見えていた社会が少しでも違って見えると感じることが「豊かさ」に繋がる。そんな社会科の授業づくりをみんなで目指していきたい。

（文責：伊佐見小 藤野亜弥・瑞穂小 藤崎卓・井伊谷小 山田航生）